



Title	色褪せた華鬢 : 葛川紀行
Author(s)	大路, とし子
Citation	懐徳. 1976, 46, p. 55-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90543
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

色褪せた華鬘

— 葛川紀行 —

大路 とし子

葛川に入る者は、參籠の行者であろうと、單なる崇信者であろうと、總て先達の指示に従わなければならぬといふ掟があつて、その先達たる條件は葛川參籠の度數の多い者といふことになつていたさうだ。たとえ比叡山千日回峰達成の大行滿でも參籠度數が少なければ先達にはなれない。この話をきいた時、私は内心、ちよつと鼻を高くしていた。突つぱなから私事に觸れて申しわけないが、私は五六年前に葛川明王院に詣でたことがあるので、講師先生や幹部の方々を除いて、一般參加者の中では先達かもしれないと心の中でおかしかったのだ。それほど、ここは比叡の奥の院として、回峰行者の道場として歴史的由緒ある地にもかかわらず、知る人も少なく訪れる人の稀な秘境なのであつた。

數年前には葛川といつても、京都の人にさえ通じないありさまで、三條京阪バスターミナルから日に二本葛川（梅ノ木）行きのバスが出ているというだけで、切符賣場の係員に尋ねても詳しいことはさつぱりわからない。

色褪せた華鬘

ままよと乗り込んだバスの隣席にさいわい坊村に歸る村の方がいて、ようやく詳細を知ることができ、大原、古知谷、途中經由、花折峠の險路を越え、坊村に下車したのであつた。この時の強い印象は、葛川とはなんと水の清らかで豊かなところだろう、といふ一事であつた。坊村の家々の軒下を音たてて流れ溢れる門川のとおりで、老女が茗荷の子と里芋をきれいに洗いあげていた。清冽な山水で洗われた蔬菜の赤紫と、里芋の肌の薄もも色が澄明な秋の大氣の中で輝くように美しかったことを忘れない。やみくもにバスにとび乗つて葛川にたどりつき、乗つて來たバスが京都に引き返すのに再び便乗して村を離れた。坊村にいたのは一時間餘りで、これが私の「葛川參籠」ということだつた。この度の一泊旅行の目的地が葛川ときいた時、あのさわやかな山村のありさまが心の中に鮮やかによみがえつてきた。

葛川へは三つのルートがある。比叡山横川から仰木へ降る七谷越え、西塔から八瀬大原を經由する龍華越え、琵琶湖に沿つて西近江路を北上し堅田から入るもの。この三つの道は途中で一つになり、花折峠の羊腸の徑を踏み越えて葛川谷に降つてゆくのである。

この日、湖西線堅田驛前を出發したバスはまず還來（もどろぎ）神社にたちよる。還來の文字が示すように、

旅や戦に出た者が再び無事に還り来ることを守り給う神というので、戦時中、生還祈願の参拜者でにぎわったそうだが、生きて還るということを口にするさえ憚られたあの陰惨な戦争體制の中で、参拜者たちは周囲の思わくを氣をかねつつひそかに神に頼っていたのではなかったろうか。

街道に近い川べりに、夏草に埋もれた磨崖佛がある。室町期のもので推定されるこの素朴な石造物はどんな人が刻んだのであろうか。街道をゆききする旅人たちは石の面の彌陀と六地藏に旅の前途を祈念し、不安に揺れがちな旅心にひとときの安らぎを得たのだろうか。

バスは途中に着いた。葛川詣での人々から「途中の堂」と呼ばれた勝華寺が小高い丘の上にひっそりと静まっていた。丘に登る小徑の傍をチロチロと清らかな水が流れてゆく。草の間にキラリと冷たく光る水のみるだけで暑さから救われるような思いがする。葛川明王院参籠の行者は必ずこの小堂に立ち寄るのがきまりで、参籠の修法はすでにここから初まり、總てを先達の指示に従う旨を誓約したという。行者は山道ですり切れたわらじをこの場所ではきかえて花折峠の險路にたちむかった。現在でも堂のかたえの杉の木に、行者のぬぎ捨てた古わらじのかかっているのを見ることがあるそうだ。

途中を出るとまもなくバスは花折峠にさしかかる。五年前に來た時は、文字どおり羊腸の溪道を——むろん舗装などされていない——バスはあえぎあえぎ登りつめ、對行車に出あうたびに肝を冷しながらの難行路であった。峠の頂上に達すると、行く手には杉の美林に埋め盡くされた安曇川溪がみおろされ、うしろを振り返ると、重なる山々のかなたに比叡の峰がはるかに低く望まれたことを憶えている。——今は、花折峠をわずか三合目ほど登ったところからトンネルが貫通して、バスは昔もなく安曇川沿いの溪道に出てしまった。便利になった反面、あの峠越えの大展望をたのしめないのはいかにも残念だった。

すでに葛川の小さな集落が溪沿いにみえはじめた。ほとんどの民家が藁葺屋根を亜鉛板か何かで覆って、昔の姿そのままの見當らないが、破風に「水」の字の草書體を彫りぬく習俗だけは固く守られているようだ。まもなく坊村に到着した。宿舎、比良山莊では冷やし素麵の晝食が一行を待ち受けていた。時刻もだいぶん過ぎた空腹に、冷たい素麵がしみわたるほどおいしかった。宿の軒下にさわやかな音をたてる山清水で晒された麵ゆえにかくも口当たりがいいのだろうか。この清流で五年前の秋、老女が蔬菜を瑞々しく洗いあげていたのだ。

山峽の夕立が劇しく大杉の梢をたたき揺すって、しばらくの間、あたりは白雨にとぎされた。が、まもなく雨雲は通り過ぎて山雨に洗われた一帯の緑はひとしお鮮やかさを増し、清々しいかぎりだった。雨の霽れ間を待つてまず地主神社に詣でる。本殿、幣殿、拜殿と縦に並ぶこの建造物は室町期のもので（拜殿だけは時代が新しい）裏股の彫刻などたいへん美しい。一枚一枚ちがった繪模様を手のこんだ技法で彫られているのがみごとであった。

この神社の根元と考えられる「思古淵の神」についての講師先生の御話はきわめて興味深いものがあつた。京都の北邊部や近江路には思古淵の神を祀る社がたくさんあるが、ここ地主神社の思古淵の神は安曇川の司水神だったかもしれない。ほかにいろいろな説もあるようだが詳細を書くゆとりがない。

比良山の裏溪を烈しい水勢で流れ下ってくる谷川に架した朱塗りの橋を渡り、石段を上ると左側が明王院政所、右側には亭々と空を突く大杉にとり圍まれて、明王院本堂が、蒼古たる構えで寂然といすわっていた。先刻の白雨に洗われて、しみいるばかり緑さわやかな樹林の中から湧き立つように鯛が鳴き初めた。この聲に應じてかなたの杉むらからも負けじと澄み透つた鳴き音がひびきわたってくる。

比叡山無動寺に所屬する天台回峰行者の參籠別院道場であるこの明王院で、毎年七月に行われる蓮華會參籠のため、すでに數日來ここに籠っているという行者が、今、本堂で行法最中とのこと。本堂の建物に近寄るのを遠慮してしばらく待っていた。どのような天台秘密の法が修されているかは知る由もないが、やがて修法を終えた白衣の行者たちが本堂を下りて、向かい側の政所へと歸つてゆく。

行者の退出したあと、本堂の内陣に案内してくださつたのが常滿氏であつた。回峰行の創始者であり、明王院道場の開基である相應和尚に仕えた童子を祖として、今に到るまで連綿と續く由緒ある家系だそうだ。何百年の間、明王院を守り續け、參籠する回峰行者の一切の世話をとりにしきつてきたのが常滿、常喜、兩家だという。

本堂内に安置されている數々の佛像や、壁にかけられた懸佛、また華鬘など、別棟の收藏庫に収まった歴史上著名人物の參籠札、多くの古文書類は、千古の自然をそのまま保つこの地の景觀とともに、まことに貴重な存在で、文化財の寶庫といつてもいいすぎではあるまい。

講師先生の御指摘によつて民族學的な興味をそそられたのは行者が手作りするという「華鬘」であつた。これはいわば素朴な花冠りで、春の野に咲く蓮華草などで花



(この図は会員の野々村富二良氏が、当日の鮎料理を写生して中川幸三氏に送られたはがきの絵である。両氏に請うてここに登載させていただいた。——編集者)

の輪を作り頭飾りにすると同じたぐいのものであるうか。細竹を撓めて輪を作り、赤青の紙をまきつけ、山の蔓草をからませた野趣あふれる一種の民藝品である。素朴で優しいこの手工藝品には、他の立派な佛教美術品にみるような重苦しさ威圧感がなく、親近感とあたたかさにあふれていた。内陣の壁にかかっているこの色あせた華鬘に脈々と傳わる原始の習俗を尊いものだと思った。

比良山荘での夕食の卓に並んだ鮎の一皿。安曇川は天然鮎の寶庫である。都會の魚屋でみる肩幅の廣い肥った養殖の鮎とはちがって、ほっそりとスマートな川の麗人正真正銘の天然鮎はまさに絶品であった。川底の岩についた苔ばかりたべて成長した香氣高い鮎の鹽焼きを味わって、なるほど冷凍鮎や養殖のものとはかくも異なるものかと感心した。

夜九時、杉木立を頒けて再び本堂に上り、夜の行法に生命力を燃やす行者の姿を格子の間から垣間みた。雨後の山の冷氣は肌寒さをさえ感じさせ、きょう、この地に到るまでの道中の炎暑がまるでうそのようだった。ほの暗い内陣の中からひびきわたる行法の聲は、うめくごとくとく、また時にはむせぶがごとく、唱えられる經文が何を意味するのやら、また夜座の修法が參籠行のうちでどのように位置するのやら、知るよしもないが、俗塵を離

れた山峽の淨闇に流れわたってゆく行法の聲々は、聽く者の胸に神秘感をもたらさずにはおかなかつた。本堂の外陣では、明夜九時―七月十八日―葛川祭の最大の行事である「太鼓乗り」の荒行が、行者によって行われるのだという。

翌早朝、朝明けの清澄な山氣を吸いながら朝食前のひとときを散策した。なかには、相應和尚が靈夢にみちびかれて瀧に參籠中、瀑水の中に不動明王の姿を感じたと傳えられる三ノ瀧まで登った方々もあった。本堂下の朱塗りの橋にたつて振り仰ぐと楓の太木が四方に枝をはりめぐらしている。やがてこの夏も過ぎ、秋の訪れが早い山峽に、この大楓がいつせいに紅葉して、燃える炎のいろを呈するさまを想像するのしかつた。ふと崖の上をみると、そこは新達の行者が起居する庵室で、窓ぎわに二人の年若い行者がくつろいでいた。ランニングジャツ姿で煙草を吹かしながら談笑しているのに、普通の若者と何らかわつたところはない。天台回峰行者、葛川道場參籠者という、何か超人間的な存在で、天狗の

ように飛行自在の秘法でも驅使する現實離れのした別人格を空想してしまう。しかし眼前の行者は現實に根をおろして現實に生きる當り前の人間にちがいない。ただ、想像に絶するような超人的努力をあえてする勇猛心と、それを持續する耐久力を備えた畏敬すべき人格ということになるであろうか。

この朝九時、頭には蓮の菴葉にも似た檜笠をいただき、白衣にわらじばきの行者が法螺貝を吹きながら葛川入りをするのを迎えることになっていたが何らかの事情で中止になったのは残念だった。葛川坊村に別れを告げたのは十時ごろだったろうか。バスは安曇川沿いの街道を朽木にむかつて走っている。朽木溪谷に興聖寺を訪ね、同寺内の秀隣院址庭園を觀て、次に小川村の中江藤樹の生家「藤樹書院」に行く。そのあと、湖岸に沿って車窓にひろがる琵琶湖の風光を賞しつつ白鬚神社に詣でる。この神社の壯麗な建築構造を觀たあと、社前からの北琵琶湖大觀をたのしむのが第二日目の日程だった。